
愛梨は落ち着かない夢のあと、汗だくで目を覚ました。辺りは真っ暗で、最初は自分がどこにいるのかわからなかった。目の前に光るLED目覚まし時計を見て確信した。それはこうだった：

04.24 JMT : 1991年11月16日 5

彼女は、自分が夢を見ていたこと、そしてハワイで過ごした時間と折り合いをつけていたことによく気づいた。15年ほど前のこのエピソードが彼女を形成し、今日の彼女を作り上げたのだ。

彼女は一瞬驚いた！呼吸音と温かい体が隣に感じられ、徐々に前の晩と夜の記憶がよみがえってきた。お祝いのビールを飲んだ後、彼女は長崎の中華街にあるバーに行った。そこで彼女はこのイケメンヨーロッパ人と出会い、私を家まで送ってくれた。彼のパッケージと、何よりもその腕前は彼女を失望させなかった。彼はとても上手で、彼女を甘やかし、欲望を満足させる方法を知っていた。彼を目覚めさせ、最近中断していたことを続けようという考えが一瞬浮かんだ。

しかし、この夢を見た後、彼女の思考は、この訪問がもたらした出来事、そして何よりも洞察に集中した。彼女が経験し、感じた真実、洞察、自由、これらすべての真髄に彼女は多くを負っていた。すべてが彼女の人生を変えた！新しい人生の始まりだった。

ニラ・G.マクヒール発行 06.2024.文章の使用および出版・転載は、著作権者の同意がある場合のみ可能です。"All rights reserved"

私の出版物はすべて、さまざまな実話にインスパイアされた部分もあるが、独立したフィクションである。実在の人物や状況との類似点は、まったくの偶然であり、意図的なものではありません。

この接触によって、若い日本人女性はこれまで知られていなかった明確な身体的反応を示した。このタッチとそれに続く反響は、刺激的であると同時に心地よいものだった。そしてサーファーの少女は、この状況をキスで締めくくった。彼女は軽薄に、仲間の海水浴客の尖った口にキスをした。これは愛にとって初めての経験で、なぜかもっとやりたいと思わせるものだった。

さらに水しぶきを浴びた後、遅めの昼食となった。午後の日差しは、日焼けした女性にとっても悔れないからだ。もちろん、色白の日本人女性にとってはなおさらだった。遅くとも東部標準時の17時ごろにはオー4ナーが戻ってくることになっており、姪をきちんとした態度で迎えたいので、ヌーディスト姿は似合わないのだ。

エレガントなライトブルーのフェラーリ365GT4が中庭に入り、車内から長身の男性が現れた。アイの叔父であるポール＝ウォーカー・デュハンだった。40代後半の男性は、見た目の体型は良いが、胴回りに贅沢な暮らしぶりが見て取れるとしても、体力はまだプラスの範囲にあった。特に、ガールフレンドと一緒にってから8ヶ月以上が経ち、体重はどんどん落ちていった。そう、彼女は彼にとって良い存在だった。あらゆる面で！彼はこの若い女性に魅了された。

一方ではナイーブで、他方ではオープンマインドな知性に恵まれている。彼女の体が矛盾を反映していることが、彼女の性格の特徴に現れ続けているからだ。彼はそんな彼女を愛していた。

カースティ＝ルー・イーストマンは自由で独立心が強く、その瞬間と欲望を楽しんでいた。彼女は欲しいものを手に入れた。しかし今のところ、彼女はいつも彼のもとに戻ってきた。それでも。しかし彼は、遅かれ早かれ、彼女がその場を立ち去り、二人の時間を終わらせる日が来ると確信していた。彼はその日を恐れていた。その日がすべてを変えてしまう。彼の人生さえも。なぜなら、その時点で彼の既知の人生は終わってしまうからだ！

温かい歓迎を受け、到着時の世間話や宿泊客の一般的な様子など、多かれ少なかれ些細なことを話した後、太平洋を望む広いテラスで夕食をとった。いつものように、ハウスキーパーのチャンがベストを尽くして、地元料理と各国料理のセレクション。彼女のチャイニーズ・テイストはいつでも味わうことができた。しかし、日本からのゲストはなぜか食欲がなく、ホストの上手ななだめ方のおかげで少しは美味を楽しむことができたようだ。しかし、結局のところ、彼らは最終的に自分たちの疑問に対する答えを求めたのだ。

永遠に続くように感じられた夕食が終わり、暗闇に光を当てる時が来た。愛がずっと心に抱いていた疑問をついにぶつけるときが来たのだ。ようやく確信が持てるようになったのだ。ついにだ！

二人の会話は永遠に続くかのようで、彼女が両親や過去の出来事について答えや真相を聞けば聞くほど、疑問は山積みになっていった。真実への渴望が満たされ、安心した気持ちで自分の部屋に帰ることができたのは、真夜中を過ぎてからだった。眠ることは問題外だった。彼女の思考は、叔父から聞いた話を中心に回り続けた。恐ろしいことばかり！しかし、ポジティブで美しいこともあった。とりわけ、彼女がアメリカで成人した今週から、父親の資産を処分することができたという事実だ。

ポール＝ウォーカー・デュハンは、姪が長年かけてコツコツと蓄えた財産を処分し、これからは自由な生活を楽しめるようにしていた。朝になって、彼女はようやく念願の睡眠を得たが、それも束の間だった。

35分弱走ったところで州間高速道路を離れ、ニウイキ・サークルに入った。それから2分も経たないうちに、ドライバーはすでにロードスターのステアリングを操り、邸宅へのドライブウェイに入っていた。電動ゲートのある素朴な塀に囲まれた中庭、ガレージ、エントランスは、ゲートを開けるとはっきりと見えた。通りから見ると、ヤシの木が数本見えるだけだったが、今は建物のアンサンブルがその美しさを見せている。3 ヴィラのスタイルはモダンで開放的でありながら、伝統的なハワイの建築の影響を受けていた。すべてがよく手入れされており、住人たちが決して飢えていないことがわかる。中庭の片隅に停まっていたフォードF100のピックアップトラックだけはだいぶ古ぼけていたが、サーフボードや道具がぎっしり積まれていたのが印象的だった。卓越したサーフモバイル。

私たちはすぐにベントをガレージに止め、スーツケースと荷物を降ろして敷地内の見学に出発した。母屋は確かにユニークだった。開放的な造りのおかげで、ほとんどすべての角度から太平洋を眺めることができる。紺碧の海が太陽の光を反射する様子は、今までに見たことがないものだった。別荘の調度品は間違いなく豪華だった。里親の家は貧しくはなかったが、このような家は指宿にはなかった。

彼女はアメリカ人の手を借りてすぐに部屋に移動し、敷地内の屋外エリアで驚いたように立ち尽くした。庭にはインフィニティ・プールがあり、ヤシの木が生い茂り、太平洋に面した棧橋のあるテラスがあった。ただただ感動的で美しい！

「ここは本当にクール？特に、ここからボードを直接海に持ち込めるんだから。サーフスポットまで車で行く手間が省ける。そうでなければ、もちろんスポットではもっとたくさんのが起こっている。セックス、ドラッグ、ロックンロールね」。サーフガールは魅力的で人を惹きつける笑顔で笑った。「プールで水しぶきを浴びて、それから食事をしよう。でも、そんな格好で水に入るなよ。ここでは服は厳禁だ！だからパンツは脱いで！」

ほとんど言い終わると同時に、少女は布団を下ろし、愛梨は20代半ばの女性の神から授かった美しさを目の当たりにした。ビキニの縞模様も青白い部分も見えない。いや！

したがって、体のすべての部位が同じ程度の日焼けを示したが、乳輪とまばらな体毛のある薄茶色の中くらいの大きさの乳輪は例外で、ほとんど金髪に近い、日に焼けたような色をしていた。それ以外の体毛は、アメリカのワックス脱毛の犠牲者だった。古典的なのは、脇の下、脚、陰部の脱毛である。

巧みなパイクジャンプでプールに飛び込み、1周するとスタート地点に戻り、プールの縁に体を寄せた。"さあ、早く、それともあなたは臆病者なの？"もちろん愛梨はそんなことはなかったし、裸になることに関しては彼女も負けてはいなかった。特に事前にシャワーとボディソープを浴びずに。しかし、養母は彼女にアメリカの野蛮人について警告していた。

でも、それがこの習慣だったらどうして？彼女はすぐに服を脱ぎ、全裸でプールの前に立った。彼女はすぐに歓迎された。"やあ、美人さん、チーズみたいに白いね、日本では太陽は輝かないの？"

そして彼女は鼻で笑い続けた。「ビキニボトムも履けないし、黒い縮れ毛があちこちに生えてる。アメリカではそんなことできないのよ」。彼女は颯爽と、そしてとても親しげにアイを腕に抱き、二人の女性は激しく触れ合った。

でも、それなら受付で待っている人たちの中から、一人の若い女性が抜け出して、若い日本人女性のほうへ向かってきた。彼女は手に写真を持ち、それを振り回しながらアイの名前を呼んだ。

「アメリカへようこそ！はじめまして。私はカースティ・ルー。ポールに迎えに来てもらったんだけど、聞かれる前に言っておくけど、私はあなたのおじさんの今の担当よ。」彼女はハニーパイのような笑みを浮かべ、少し狼狽している日本人の少女の手をつかみ、彼女と荷物を出口に向かって引っ張った。「私はトロリーを持って、ちょっとごちなく立っています！サーヴィス・カー・ガイに切符を切られる前に、さっさと行こうよ」。

二人はターミナル前の短期駐車場まで疾走した。若いアメリカ人はシャンパン色のオープントップのメルセデスSLロードスターに向かった。あっという間に、2つのバッグと旅慣れた乗客の手荷物はトランクと後部に収納された。愛もこの豪華な車のシートに座ると、二人は丹生木サークルに向かって加速して出発した。

そこには、太平洋の息を呑むような絶景が一望できる叔父の所有地があった。州間高速道路H-1にはすぐに到着したが、その後はゆっくりとした道のりだった。道路は市街地を蛇行し、メルセデスのクルーを渋滞から渋滞へと導いた。

しかしそのおかげで、アイは運転手と叔父のガールフレンドを見ることができた。少し色あせた髪はこのブルネットの女性は、せいぜい20代半ばから後半と推定され、最初の鑑定で、これが典型的なサーファー・ヒッピー・ガールであることがわかった。彼女の服装だけで、そのことが印象的にわかった。

結び目のあるシャツを頭から羽織ったほかは、とてもタイトな明るい色のビキニ・トップと大胆なブルージーンズのホットパンツだけだった。このアンサンブルは、彼女の日焼けした体を見事に露わにしていた。彼女の肌の色だけでも、ニッポンからの輸入品の日本的な青白さとは対照的だった。彼女の身長は180センチほどで、小柄な日本人女性より明らかに高かった。

彼女の輝く顔は、太陽と海によって脱色された肩まで髪に縁取られていた。長いまつげと自然な眉毛の完璧な形の目、官能的な口元、アメリカ人らしい魅惑的な笑顔がそれを引き立てている。このアンサンブルの頂点は、ノーズピアスと絵に描いたようなそばかすのある完璧な形の鼻だった。しかし、このアメリカ人の他の部分を見ると、このパッケージはほとんど失われている。彼女の体型！

この体は本当に息をのむほど均整がとれていた。小柄でありながら筋肉質で、スリムでアスレチック。しかしエレガントでもある。そして何よりも、女性的で魅力的で挑発的な属性に恵まれていた。アイは、彼女の連れのバストは自分より大きくないと見積もっていたが、彼女の極端な細さのせいで、この最大推定Cカップはかなり豊満に見えた。しかしそれは、彼女の超ロングで優雅でありながら筋肉質な脚と同じように、彼女に似合っていた。

総じて、この女性は威圧感以上の美貌とカリスマ性に恵まれており、肉体的に彼女に匹敵する女性はこの地球上にほとんどいない。加えて、彼女は友好的で勝ち気で、自分自身と世界に満足しているように見えた。アイが現在持っていないもの、あるいは持っていないものすべて。

第3章-1

ヨイ・カコ

1991年11月16日～12月2日／平成03年

長崎

笑って過ごそうが泣いて過ごそうが、それは同じ期間だ。

* 禅の知恵

.....

東京-羽田からハワイまでのパンナムによる約9時間のフライトは、特筆すべきアクシデントもなく無事に終了した。日本の首都を離陸するとき、すでに日本をしっかりと掌握していた暴風前線を通過したにもかかわらず、その前線は不快な湿度の大気で東日本全体を覆い、雷と稲妻を伴う暴風雨と大雨に見舞われた。それが日本の夏だった。

梶谷愛はそんなことは気にならなかった。この火曜日、1973年7月24日は、とにかく彼女の歴史に残る日だった。初めて日本国外に出るだけでなく、ここアメリカ50番目の州で叔父に再会するのだ。これらすべてが、18歳になったばかりの彼女にとって、この試み全体をよりエキサイティングなものにし、またパニック以上のものにしていた。このフライトの背景だけでも並大抵のことではなかった。ちょうど1年弱前、彼女がかすかな記憶としてしか知らない実父の兄が日本に現れたのだ。彼は10年以上も姪を探していたが、ついに日本列島の最南端で姪を見つけたのだ。彼の話は冒険的というより、事実であることがわかった。

里親は当然、こうした状況や、特にこの話題そのものを快く思っていなかった。結局のところ、里親の娘は一家の名誉を汚すような、言いようのない関係の子供だったのだ。彼らはそのアメリカ人の叔父がまだ存在していることを知らなかったのだ。彼が自分たちの前に立ち、愛に接触したとき、少なからず恥ずかしかった。被後見人の最後の13カ月は、答えのない、あるいは答えたくない質問ばかりだった。しかし、この1週間ですべてが変わった！福岡のアメリカ領事館からの使者が、待ちに待ったものを持ってきたのだ。アメリカのパスポートだ！海軍佐世保基地の米軍病院で生まれた彼女の父親は、彼女を真のアメリカ人にしたのだから。しかし、彼女はまだ新しい名前に慣れなければならなかった：アイ・ジ・スー・デュハン

このパスポートを手にしたことで、アメリカの法律では成人年齢に達し、世界は彼女に開かれたものとなった。彼女はこれを利用して、ついに自分の家族の歴史を知りたいと思った。

定刻の10時20分（東部標準時）、約7,200kmの飛行距離を経て、ボーイング707はホノルル国際空港のランウェイ4R-22Lに静かに、そして巧みに着陸した。短いタキシング時間の後、航空機は国際線ターミナルのエワ・ガルウィングに到着し、降機が始まった。入国手続き、手荷物受取、税関手続きは比較的短時間で終わり、日本からの乗客は空港の広いホールの真ん中に立った。かなり孤独だ。混雑にもかかわらず。さまざまな言語が飛び交い、音楽が鳴り響き、あらゆる種類の騒音が響く。彼女の不安は刻一刻と増していった。そのおじさんはどこにいたのだろうか？結局、彼は彼女を迎えに来たのだ。彼女2がわかるようにと、彼らは最近の写真を彼に郵送した。実父の弟が最後に初めて故郷を訪れてから13カ月近くが経っていた。